

「恩返しをしたい」

3号車—A 法政大学 荒井麻里

中国訪問後、最も強く感じたことは「中国と日中友好団体に恩返しをしたい」ということです。中国滞在中、私は自分の目で中国について学べただけでなく、とても豪華なおもてなしと温かい歓迎を受け、中国から日本への好意を強く感じました。あのような経験をさせていただけたのは、中国や日中友好団体が、日本の学生である私たちが中国と日本の懸け橋になることを強く期待し、一週間の費用を負担するだけの価値があると信じてくださっているからだ実感しました。

そのような中国に対する印象は、訪中前に比べて大きく変化しました。印象が変わった観点は数多くありましたが、特に四つあります。

一つ目は、中国の人々に対する印象です。もともと中国の友人との交流を通して、中国の方々に対する印象は良かったのですが、偏った報道や日本に来ている中国人観光客の街中での話し声などから、悪い印象が全くなかったわけではありません。しかし、実際に中国に行き、現地の大学生やバスガイドさんと交流し、ホテルの方々や中国の飛行機のCAさんから接客を受ける中で、人々の温かさを強く感じました。また、中国で自分たちが集団で街中を歩く立場になってみて、非日常に興奮して大きな声で話し、道を塞いでしまっていたことに気が付きました。異国で現地の人に迷惑をかけてしまうのは、国や国民性に関係なく、観光客全体に共通する問題であると感じました。海外に行く際は気を付けようと思います。

二つ目は、日中の歴史に対する印象です。「九・一八」歴史博物館を見学し、中国の人々が受けた被害や日本軍の人道に反した行いを初めて詳しく知りました。その内容は日本の学校の教科書には載っていないものが多く、日本が中国の人々に与えた苦しみの大きさに唖然としました。日本の義務教育では、原爆や沖縄戦など自国が受けた被害については重きを置いて学びましたが、日本がアジア諸国などに与えた事実については浅くしか触れられませんでした。その結果、なぜ日本を嫌う人がいるのか分からないまま、反日の人を嫌うということが起きているのだと思います。日中友好のためには、義務教育の在り方から変える必要があると感じました。

三つ目は、中国には東京のような大都市がいくつもあることです。訪中前は、中国で栄えているのは上海・北京・広州だという印象が強く、今回訪問した長春や瀋陽のことは知らなかったため田舎であると予想していました。しかし、実際に行ってみると高いビルが立ち並ぶ都会で驚きました。また、中国共産党歴史展覧館で見た5D映像を通して、これ

らの都市以外にも数多く栄えている地域があることを知り、中国の経済や生活の規模の大きさを感じました。

四つ目は、食事です。訪中前は、中国では生野菜や果物をあまり食べられないのではないかと心配していましたが、実際には生野菜や果物だけでなく、豆乳やヨーグルトといった健康食品もとても美味しく、驚かされました。

また、中国に対する印象の変化だけでなく、疑問に感じたこともありました。それはトイレのクオリティーです。中国は経済が発展しているにもかかわらず、ホテル以外のトイレはあまり快適とは言えませんでした。訪中期間で唯一生活しにくいと感じた部分であったため、日本のトイレ技術をもっと広め、中国の人々にも快適なトイレを提供できたらと考えました。

このように、私にとって今回の中国訪問は学びが多く、大変大きな収穫となりました。今後は、ここで得た学びを日中友好のために活かし、中国や日中友好団体の皆様のご期待に応えていきたいと考えています。大学生の私に今できることには限りがありますが、まずはこの貴重な経験を友人や周囲の人々に伝えることから始めます。また、中国に対してさらに関心と親しみを抱くようになったため、今回訪れることができなかった地域にもぜひ足を運び、理解を深めていきたいと思っています。

「自分の目で見た本当の中国」

3A 青山学院大学 稲葉弘

今回、私は訪中国の一員として北京・長春・瀋陽の三都市を七日間かけて訪れる貴重な機会をいただいた。出発前の私は、中国に対して「街は汚く、人で溢れかえっている」という負のイメージを強く抱いていた。しかし、実際に足を運び自分の目で見た光景は想像とは大きく異なり、むしろ清潔で整った環境が広がっていた。特に首都北京においてさえ、東京と比べても人混みでごった返している印象はなく、快適に過ごすことができた。この経験を通じて、自分がどれほど先入観に縛られていたかを痛感させられた。訪問中の食事は基本的に中華料理であった。正直に言えば、私は食わず嫌いが多く、独特の香りや見た目に抵抗を覚えることが少なくなかったため、十分に挑戦できなかったことは自分の反省点である。せっかくの異文化体験の機会に、自分の好き嫌いによって制限をかけてしまったのは残念であり、今後はこうした壁を乗り越えていく必要があると強く感じた。

生活環境については、日本と比較すれば劣る部分があると感じる場面もあったが、想像していたよりもずっと快適であった。ただし、トイレに関しては改善の余地を強く感じた。中国の国土規模や発展状況を踏まえると、より衛生的で最新鋭の設備を整えることは今後の課題であろう。衛生面は生活の質に直結するため、率直な意見としてここは注目すべき点だと考えた。

現地大学での交流は非常に印象深かった。中国の大学生は日本語学習に真摯に取り組んでおり、その高いレベルに大いに驚かされた。流暢に日本語を操る学生が多く、彼らの熱意と努力は素直に尊敬に値するものであった。一方で、日本は島国であることからか、語学習得に対する意識が学生の間で低いのではないかと感じる。国際社会で活躍するには言語力が不可欠であり、日本の学生ももっと積極的に語学習得に励む必要があるのではないかと考えさせられた。

また、歴史的・文化的な遺産を実際に目にすることも大きな学びであった。万里の長城に立ったとき、何千年も前にこのような巨大な建築物を築き上げた技術力と、それが今日まで残されている事実には圧倒された。さらに故宮では、圧巻の規模と精緻な造りに心を打たれた。当時の人々の知恵と労力が結集した建築群は、歴史の重みを直接肌で感じさせてくれた。

こうした体験を通じて、中国へのイメージは大きく変わった。渡航前は正直なところ良い印象を抱いていなかったが、実際には先入観にとらわれすぎていたことに気づかされた。現地での経験を通じて、自分の視野がいかに狭かったかを思い知らされたのである。今後

は中国に限らず、これまで何となく避けていた国々にも積極的に足を運び、実際に自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じることを大切にしていきたい。

今回の訪中団での経験は、自分の固定観念を覆すとともに、異文化理解の重要性を改めて教えてくれた。短期間ではあったが、多くの学びと気づきを得られたことは、今後の人生において大きな財産となると確信している。このような素晴らしい機会をいただけたことに、心から感謝申し上げたい。

「訪中を終えて」

3-A 早稲田大学 今井ゆき

私の中国に対する関心は、大学の授業で中国語と中国の古典文学に触れたことをきっかけとしています。第二外国語で中国語を選択したのは、習い事の書道に取り組む際、とても身近にある漢詩について、その土地の言葉で理解し、発音したいと思ったためです。以来、その響きに魅せられ、漢詩、漢字、中国語に対する意識はさらに、中国文学全体に対する興味へと広がっていきました。加えて、文学と切り離せない文化についても、もっと理解したいと考えるようになりました。また、志怪小説など中国文学を学ぶ中で強く感じたのは、文化を知る上ではその土地を知ることが欠かせないということでした。

今回の訪中団は私にとって、中国を訪れる初めての機会となりました。入国の日、飛行機の窓から、地上に広がる豊かな緑と長い河を見下ろした時、訪中が叶ったことを実感し、これから始まる1週間にとてもワクワクしたのを覚えています。これまで地図帳や教科書で学んできた中国は、あくまで、日本国内の視点にとどまるものでしたが、自分の目の前に広がっていたのは、想像以上に広く大きく、歴史の重みを強く感じさせる場所でした。特に故宮は、中学生の頃、映画『ラストエンペラー』を観て衝撃を受けたこともあり、今回の訪中で強く心に残る訪問先となりました。この7日間には長春や瀋陽も訪れたため、愛新覚羅溥儀の人生に思いを馳せる場面は少なくなかったと思います。また、長春・瀋陽での歴史博物館見学は、日中の歴史と向き合い、これからの平和について考える時間にもなりました。

長春世界彫塑公園では、数々の彫塑作品を鑑賞しました。孔子や老子、屈原や白居易の彫像もあり、どれも見上げるほどの大きさで、迫力がありました。彫塑館を見学後、彫塑公園を巡りましたが、緑に囲まれた自然豊かな空間で、心地良い風が吹いていました。三都市を訪れ、その気候や生活に触れる中で、古代中国の仙境が、深山幽谷・中国の地形でなくして生まれ得ないように、現代においても、風土と文化、人々は、密接な関わりにあるのだと感じました。

また、吉林大学、遼寧大学に通う学生方との交流も、印象的な経験となりました。環境問題に関する意見交換はもちろん、大学での学びやお互いの好きなことについても語り合え、時の流れがあつという間に感じられました。その中では、日中の文化の違いに驚くことは多い一方、共有する価値観もあるのだと、新たな発見も得られました。彼らとの交流は、「次回は中国語で会話ができるようになりたい」という、今後の中国語学習のモチベーションと目標にもなりました。

このように初めての中国訪問は、中国の長い歴史と文化を肌で体感する時間になりました。この7日間に自身で吸収したことは、これまでの中国に対する平面的な私の理解を、立体的なものへと立ち上げてくれたと感じています。

結びに、今回の訪中に際してご尽力くださったすべての方々へ厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

「先入観を超えて出会った中国」

3号車 A班 南山大学 木村優月

訪中前、私は正直、中国に対してあまり良い印象を持っていなかった。SNSやニュースで目にするのは、一部の中国人によるマナー違反や反日感情が背景にある事件の報道が多く、「中国は怖い国」という固定的なイメージが頭の中にできあがっていた。情報源はSNSやマスコミであり、日本人目線に偏っているものが多かった。真の中国を自分の目で見てみたい、中国からみた日本の印象を知りたいと考え今回の訪中に応募をした。

実際に中国を訪れてみると、その先入観は大きく覆された。まず驚いたのはスケールの大きさだ。世界一の人口を支える国のエネルギーは圧倒的であり、北京だけでなく、長春や瀋陽も想像以上に発展していた。都市ごとに異なる文化や料理に触れたことも新鮮で、特に瀋陽ではヨーロッパのような街並みを目にし、これまで抱いていた「中国らしさ」とは違う一面を感じ取った。中国の多様な文化についてより知りたいと感じた。

歴史についても大きな学びがあった。教科書に載っていなかった真実が多くあり驚いた。日本の軍国主義は非人道的行為を繰り返し、罪のない多くの人々の尊い命を奪った。同じ日本人による行為だと信じたくないような事実を知り、心が痛く残酷な写真が頭から離れない。「中国は日本の軍国主義と現代の日本人を別のものとして見ている」という言葉を聞き、その考えに至るまでには長い努力と時間があったのだろうと感じた。吉林大学に訪問した際には、日本語を学ぶ大学生と交流する貴重な経験をした。残酷な歴史を経ながらも日本に興味を持ち、温かく迎えてくれる人々に出会えたことは大きな喜びだった。一方で、戦争や侵略は過去の話ではないことにも気づかされた。世界では今も、戦争により罪のない人々の命が奪われている。「歴史を銘記することは未来を開くためであり、戦争を忘れないのは平和を守るためである」という言葉が胸に残っている。歴史を顧みれば、外国への武力侵攻は必ず失敗するという教訓も改めて実感した。歴史は「最高の教科書」であり、学び続けることが私たちに課せられた責任だと強く感じた。

今回の体験を通じ、今後日本と中国がどう付き合っていくべきかについても考えた。まず、両国の歴史を正しく理解することは最低限必要なことだ。過去を学び、互いの立場や痛みを理解したうえで初めて、真の信頼関係は築かれる。隣国同士が良好な関係を保つことは、両国だけでなくアジア全体の安定と発展にも不可欠である。また一人の日本人として、歴史を学び続ける姿勢と、隣人を尊重し対話を重ねる努力を怠ってはならないと強く感じた。

今回の訪中は、私自身の人生にも大きな影響を与えた。実際に現地に足を運び、肌で感じることの大切さを再認識した。マスコミやインターネットから得る情報は、限定

的で偏った面がある。自分の目で見て、人と直接話し、肌で感じることでしか分からない事があると感じた。これからも国や文化に対して先入観を持たず、自分の五感で確かめようとする姿勢を大切にしていきたい。

7日間の訪中は、中国を知る旅であると同時に、自分自身を見つめ直す旅でもあった。中国への見方だけでなく、人との向き合い方や歴史への向き合い方も大きく変わった。今後は今回の学びを周囲と共有し、日本と中国がより良い未来を築く一助となれるよう、学び続け行動していきたい。

「7 日間の訪中団での経験について」

3 号車—A 班 東洋大学 窪田一慶

2025 年 9 月、私は訪中団の一員として中国を訪れる機会を得た。本プログラムでは、北京・長春・瀋陽といった主要都市を巡り、歴史や文化、現代社会に触れる貴重な体験を積むことができた。単なる観光ではなく、現地の大学生との交流や歴史博物館の見学を通じ、日中関係の歩みや相互理解の大切さを深く考える時間となった。本稿では、訪問地ごとに得た印象と学びをまとめ、今後に活かしたい視点について述べたい。

最初に訪れたのは北京であった。世界遺産の万里の長城は、その壮大さと歴史的重みを全身で感じることができる場所であった。実際に石段を歩きながら見渡すと、どこまでも続く城壁が山々を縫うように延びており、かつて国を守るために築かれた防衛線が、今日では世界中から人々を惹きつける観光資源となっていることに感慨を覚えた。さらに、共産党歴史展覧館を訪問した際には、中国の近現代史と国家形成の過程について理解を深めることができた。展示を通じて、戦争や改革の歴史を学びながら、日本の歴史教育では触れられる機会が少ない視点を知ることができた点が印象的であった。故宮では、中国皇帝の文化や伝統に触れ、その壮麗な建築と収蔵品の数々から、悠久の歴史を持つ文明の厚みを実感した。広大な敷地に並ぶ宮殿を歩く中で、過去の権力と文化の象徴が、現代においても人々の誇りとして残されていることを強く感じた。

続いて訪れた長春では、東北民俗文化の一つである魚皮画づくりに挑戦した。自然素材を活かした芸術作品を自ら体験することで、地域に根差した文化の大切さを実感した。伝統工芸に触れることで、人々が自然と共生しながら独自の表現を生み出してきた歴史を理解することができた。また、東北師範大学の学生との交流では、SDGs をテーマに意見を交換した。討論では「再生可能エネルギー」「食品ロスの削減」「教育格差の是正」など幅広い話題が取り上げられた。日本と中国の学生がそれぞれの立場から持続可能な社会について語り合う中で、環境問題や地域社会の課題には国境を越えた共通性があることを学んだ。同世代の学生との対話は、国際的な課題解決に向けて若者が果たす役割の大きさを再確認する機会となった。さらに、長春世界彫塑園を見学し、多様な彫刻作品を通じて芸術の国際性と地域性を学ぶことができた。屋外展示の作品群は、世界各国の芸術家が文化を超えて表現を行う姿勢を示しており、異文化理解の重要性を芸術を通じて感じ取ることができた。

瀋陽では、『九・一八』歴史博物館を訪れた。ここでは満州事変に関する展示が行われており、日本人として過去の歴史と真摯に向き合う必要性を改めて感じた。被害の歴史に触れることは心が痛む体験であったが、同時に、未来に向けて友好関係を築いていくためには過去を学び続けなければならないと強く思った。また、遼寧省博物館や老北市の訪問

では、中国の多様な歴史と生活文化の一端に触れ、さらに中国工業博物館では近代化と産業発展の歩みを学んだ。近代の産業発展が中国社会に与えた影響を知ること、経済成長の背景にある人々の努力や苦勞を理解できた。こうした学びは、観光の表面的な印象だけでは得られない深みを与えてくれた。

今回の訪中国を通して、私は中国の歴史・文化・社会を多面的に学ぶと同時に、現地の人々との交流を通じて友情を育むことができた。送別会などでの学生との交流では言語や文化の壁を越え、互いを理解し合う喜びを実感した。とりわけ、笑顔や身振り手振りを交えながら語り合った時間は忘れられない思い出である。中国の学生や友人と築いたつながりは、これからの日中交流を考える上での大きな財産である。歴史を学び、文化を尊重し、未来を共に創る姿勢が重要であることを強く意識した。今後は今回の経験を自身の学習や将来の進路に活かし、国際社会における相互理解と協力の架け橋となれるよう努めていきたい。

「直接中国を訪れたからこそ学んだこと」

3-A 長野県立大学 齋藤 時富羽

普段見るテレビなどのニュースや学校で学習する中国に関してマイナスな部分が多く、私自身もあまり良い印象を持っておらず、自分自身で本当の中国を体感したいという思いから参加した。この訪中団に参加したことで中国の文化に触れたり、中国の学生と交流したりして数多くの忘れられない思い出を残すことが出来た。その中でも特に3つの出来事が印象に残った。

1つ目はホテルのスタッフの方や地元の人、空港のスタッフの方など中国人と話す機会があった時のことだ。訪中前は中国人と話す時簡単な英語は通じると考えていたが、予想以上に通じず、今回の訪中で英語が通じたのは客室乗務員だけであった。しかし、ホテルのスタッフの方や空港のスタッフの方と簡単な中国語やジェスチャーを使ってやり取りをし、最終的に伝えたいことを理解してもらうことができた。また、ラストエンペラーの舞台になった紫禁城に行く際に同行の事務局の方から一緒に写真を撮る時の中国語を教えて頂いた。紫禁城の中では同年代くらいの年代の漢服を着た中国人に中国語を使って話しかけた。初対面の中国人に話しかけることは緊張した。しかし、習った中国語を使わないのは今後後悔するかもしれないと思い声をかけた。私の話す中国語は流暢ではなく、はじめは伝わらなかったけれど、最終的に伝えることができた。写真を撮るだけでなく会話をすることができ貴重な経験になった。これらの出来事を経験し、言葉は通じなくても何とかして相手に伝えようとする気持ちさえあれば案外中国人とやり取りができることを学んだ。

2つ目は大学生交流の時のことである。訪中前は何を話したら良いか不安だった。文化的な側面に触れても良いのだろうか？と少し不安な面があり、はじめは当たり障りのない質問からはじまったがお互い少しぎこちない雰囲気だった。短い沈黙の後、勇気を出して好きな映画を訪ねたところ、日本の映画やアニメに関心があるとの返答がありとても驚いた。私たちのグループだった中国の学生だけでなく、中国の学生の間で日本のアニメなど日本の文化に興味を持ってくれていることに心が温まった。気付けばはじめはあまり弾まなかった会話が終わりになるにつれ盛り上がっていて、帰る時にはまだ一緒にいたいと思うほど仲を深めることができた。この交流を通し、訪中後は他国の言語だけでなく文化的な側面を知ることの重要性を学んだ。私自身中国のドラマなどに関心があり、この訪中を機に見たいと思うようになった。

3つ目は九・一八歴史博物館を訪れた際のことだ。中国の民間人が日本軍の標的にされ

多くの犠牲者が出たことを知った。日本軍が中国人に対して行った残虐な行為の写真や遺品が展示されていた。日本の教育では一部しか取り扱われず、今回の博物館で初めて知ったこともあった。この歴史があったことは忘れてはならないと感じた。

この3つ以外にも中国の高速鉄道や高層ビルをはじめとするあらゆる最先端の技術にも驚いた。

これらの出来事を通して、訪中前は中国人に対してあまり良い印象を抱いてはいなかったが、代わりに話しかけると気さくな人が多いなど良い印象を持つようになった。中国人に関しての悪いニュースが流れるニュースが流れるたびに中国人と一括りにしてしまい、ほとんどの中国人はとても良い人という考えがなかったことに気付いた。中国とこれからも友好関係を築くに当たり、中国に関して日本で聞くニュースを鵜呑みにせず実際に中国に行って確かめることが必要だと感じた。さらに今回仲良くなった積極的に交流し We Chat などを交換し、あった後も会話を続けることも大切だと感じた。これらに加え実際に体験した中国を SNS で発信したり、家族や友人に伝えたりすることも役目だと思う。日中の友好関係が続いていくには私達若者がどれだけ日中の友好に関わっていくかが鍵となるだろう。

最後になりますが、この訪中団を有意義なものにくださった日中訪中団はじめ関係者の皆様に感謝申し上げます。

「背景にあるもの」

3-A 法政大学 清水朔歩

初の中国訪問を終えて第一に思うことは、また必ず中国を訪れたいということだ。今回の訪中参加を通して、中国を知ることができたというよりはむしろ、まだまだ中国のことを知らない、もっと知りたいという気持ちになった。

我々の団は、中国における「抗日戦争勝利 80 年記念」の年の抗日戦争勝利記念日（9/3）と柳条湖事件（9/18）の間の日程で訪中した。日本に対して緊張が高まる時期ということで、街を散策する機会は少なく、多くの博物館や歴史館、美術館を見学した。その中で学んだことは、中国や中国の人々にとって日本による侵略の歴史がいかに重いものであるか、そして、そのことに我々日本人がいかに無知で無自覚であるか、ということである。戦中の日本軍の残虐な蛮行から現代の日本の国会議員の動きに至るまで、「日本人」の私が知らない情報も多くあり、またそれらがどのように展示され、見られているかを見た。多くの人と同じように、私は幼い頃から「戦争はだめだ、二度と繰り返してはならない」と教育を受けてきた。また『ちいちゃんのかげおくり』や『火垂るの墓』、広島平和記念資料館などを通して、実感をもってそのように考えてきた。このことはもちろん重要であるが十分ではない、と今は思う。そこには、「日本の加害」という視点が抜け落ちていたからだ。長春の「東北陥落史陳列館」や瀋陽の「九・一八歴史博物館」では、中国語と英語に加えて日本語の説明書きも添えてあった。私にはこれが、日本人にこそこの歴史を知ってほしいというメッセージに思えてならなかった。日本の中国侵略は決して遠い昔の話ではなく、また残念ながら、現在の我々は戦争が無関係の世界に生きているわけではない。今回学んだことを忘れず、またさらに学びを深めて、日中友好、ひいては世界平和に貢献したい。

帰国して数日後に 9 月 18 日を迎え、日本のテレビでは中国の様子が報道された。そこでは 731 部隊についての映画が中国で公開されたことや、「反日感情」が高まる日であり日本人学校は休校になったことなどが取り上げられた。訪中を終えたばかりの私はこの報道の在り方に違和感を覚えた。もちろん報道内容は必要な情報ではあるだろうが、一方で、なぜ「反日感情」が高まるのか、その背景にどんな歴史があったのか、という報道は日本のメディアにおいて極めて少ないように見える。報道の、「何もないこと」ではなく「何かがあったこと」を伝えるという避けられない特性や、人々の安全を確保するという目的を考慮すれば、仕方のないことなのかもしれない。しかしそれを受け取る我々は、報道されることが全てではないということ、例えば歴史的な背景があるということ、コメントが取り上げられた数人の中国の方を中国人代表や中国人の大多数であると捉えないことなどに注意しなければならないだろう。

今回の訪中で悔いが残ったことといえば、中国語をほぼ学んでいない状態で行ってしまったことである。土産屋やスーパーマーケットの店員の方とほぼコミュニケーションが取

れず、相手がたくさん話してくれた際にも全く理解することができなかった。中国語のできる団員が路上で果物を売っている人に話しかけたり、中国の学生と中国語で盛り上がりたりしているのを見たときは心底羨ましく思った。またインターネット上でも、中国語ができなければアクセスできないコンテンツが膨大にあることが分かった。帰国した次の日から早速中国語の勉強を始めたが、漢字を知っているというアドバンテージもあり、新しい発見もあり、本当に興味深い言語である。中国語ができるようになってもう一度中国を訪れることが、今の目標である。

「中国訪問を通して得た経験」

3A 東京外国語大学 高田千暁

私は高校生の際にマレーシアへの留学を通して華人の文化や華人を送り出した中国の文化に興味を持ち、大学では中国語と中国の地域研究を中心にマレーシアの地域研究も学んでいます。今回訪中国に参加したのは、前記の通り華人という存在を深く知る上で切っけは切り離せない中国の現在の文化や歴史的な側面を1年生であるこの時期に学ぶことで今後専門性が高まる大学での学習に役立てたいと考えたからです。

今回は北京、長春、瀋陽という中国の東北地方を中心に訪問したこともあり、食事や街並みなどにマレーシアの華人文化とは違った特色も見られとても興味深い体験ができました。特に魚皮画の制作体験では、その地方で盛んに漁が行われ、魚の皮までも余すことなく利用する伝統を学ぶことができ、東北料理のレストランでの食事では、使用する食材や味の違いからも中国内における文化の多様性を知ることができました。

遼寧大学の生徒との交流会では、一緒に昼食をとった学生の方と中国語と英語を混ぜてコミュニケーションをとりました。私が中国語で分からない単語は彼女がすぐ英語で解説してくれたり、中国語や英語に自信のない日本側の参加者に私が日本語で説明したりと個々の苦手を補い合う関係性が自然と築かれ、心地よい空間でした。「分からなかったらいくらでも聞いて！」と言う中国人の彼女が、私が華人に興味を持つきっかけとなったマレーシア華人の友人の「分からない言葉や文化は全部聞いて。そして私にも日本について聞かせて。せっかく別の国出身の人間同士なんだから。」と言っていた姿と重なり、思いがけず自分の大学での学びの原点を確認する良い機会ともなりました。

近年、世界的に「〇〇人が」、「〇〇出身者が」といった特定の民族、地域に対するヘイトクライムが散見されます。私たちが中国を訪れた際も、時期的な問題もあり、大使館は「過去の日中間の歴史にかかわる日においては、反日感情の高まりに特に注意する」よう注意喚起を行い、私たちも警護の方と行動を共にする場面がありました。そのような現実もある一方、2回の大学訪問では中国語、英語、日本語を駆使して何とか我々とコミュニケーションを取ろうとくださる優しい学生にも多く出会えたのもまた事実です。私たちが訪中団員はそのような両側面を持った今回の訪中の一部を切り取って見ることなく、どちらも現在の日中関係を表すものとして理解していく必要があります。そして日中間だけでなく他国との間でも、国家同士だけでなく経済的、文化的なつながりからもより良い関係を築いていけるよう働きかけることが次世代である私たちに求められてると考えます。また、私個人としては、今回得た知識や体験を今後の大学での中国及び華人文化研究、中国語学習などに活かし、大学で深めた知識を社会に貢献出来るよう努力していきたいと思っています。

最後になりますが、日中友好協会、中日友好協会を始めとする今回の訪中団の企画、運営を行ってくださった方々、訪問した大学や博物館の関係者の方々など今回の訪中団に関わってくださった全ての方に心から感謝申し上げます。

「今日、中国を好きになりました」

3号車-A班 法政大学 戸塚 敦士

私がこのプログラムに参加した理由は、中国に対して否定的な印象を持つ人々の考え方を変えていきたいからである。日本では、中国に関する情報に偏りがあり、否定的なイメージがある。その影響で、自身を含め親族や友人、多くの人が中国に対し偏見を持っていた。しかしオーストラリア留学中、建設現場で共に働いた中国人作業員たちは真面目で親切だった。彼らと交流する中で「中国人＝悪い」という先入観は崩れ、文化や人柄に魅力があることを実感した。この経験から、自分の目で見聞きしたことを周囲に伝える存在になりたいと考え、今回の訪中を強く志願した。

実際に訪れた中国では、まず国の壮大さと科学技術の高さに圧倒された。博物館で体験したフライングシアターでは、中国各都市を空から旅するような映像が映し出され、国土の広さや景観の多様さを体感した。また宇宙や軍事関連の展示からは、急速に発展してきた科学技術、国力の高さを知った。これまでニュースや数字でしか聞いたことのなかった「大国・中国」という言葉を、肌で実感する瞬間だったと思う。一方で、歴史に触れる場面では胸が締め付けられた。9.18 歴史博物館に足を踏み入れた瞬間、空気が一変し、緊張感に包まれた。外では日本軍の悪事を訴える声が響き、重苦しい雰囲気を感じた。日本人として複雑な思いを抱きつつも、加害の歴史に直面することの大切さを改めて考えさせられた。こうした体験は、相互理解の出発点として必要不可欠なものであると強く感じた。文化体験では、太極拳が特に印象に残っている。ゆっくりと体を動かす中で全身の筋肉を意識し、健康づくりに通じることを学んだ。将来の体の衰えを防ぎ、転倒せず階段を上り下りできる力につながると知り、中国文化が人々の生活に根づいていることを実感した。また、街中や太極拳の練習中に通りすぎる多くの人が地面に唾を吐く光景にも驚いた。日本人が人目を気にする文化と対照的であり、日常生活の価値観の違いを垣間見た瞬間だった。大学生交流では日本語を流暢に話す学生が多く、映画やエンタメの話題で盛り上がった。同世代だからこそ共感できる価値観があり、距離が一気に縮まったと感じた。また文化体験を通して 4000 年に及ぶ中国の歴史の重みを感じた。伝統が受け継がれている様子に感動し、文化の継承の大切さを学んだ。さらに学食で食べた料理はとても美味しく、思わずおかわりしたことも鮮明に覚えている。個人的に特に印象深いのは、日本文化を紹介するパフォーマンス披露だ。夜遅くまで仲間と練習を重ね、本番で成功したときには大きな達成感と共に、中国の学生に日本の伝統を知ってもらえた喜びを感じた。

この一週間で、私は中国を多面的に理解することが出来たと思う。中国という国を好きになった。広大で発展を続ける国でありながら、重い歴史を抱え、同時に人々の暮らしや文化は日本と近い部分もある。特に同世代の学生たちとの交流は、国境を越えて友情を築くことができるという確信を与えてくれた。今後は、この経験を周囲に伝えていきたい。家族や友人に五感で得た実体験を共有し、少しでも偏見を和らげる努力を続けたい。ま

た、私が春から就職する会社では中国とも技術協力を行っており、今後も国際的な繋がりを持つ可能性がある。今回の交流で得た理解や視点は、そうした現場でも役立つと信じている。今回の訪中を経て、自分自身の成長にとどまらず、日日、そして日中の相互理解を広げる一歩になると確信した。最後に、3A、3号車の皆、日中友好協会の関係者の皆さん、一生できない経験をさせてもらいありがとうございました。一生の財産です。

「歴史と交流から学ぶ中国と未来」

3A 朝日大学 内藤千尋

この度、私は訪中国の一員として北京・長春・瀋陽を訪れる機会をいただきました。北京に降り立ち最初に目にしたのは、人々の生き生きとした姿でした。道を歩く人も、市場で買い物をする人も、誰もが活気に満ちていて、日本の日常と比べてもエネルギーの強さを実感し、このような活気のある空気そのものが中国を進化させていく栄養源なのだと肌で感じました。

そんな中で最も心に残ったのは、瀋陽の「9.18 歴史記念博物館」を訪れたことです。今年は八十年という節目の年であり、そのタイミングで現地に立てたことに深い意味を感じました。展示されていた写真や資料は、教科書で学んでいた知識をはるかに超えており、展示の文を読みながら当時の被害に思いを馳せるうちに胸が締めつけられました。それと同時に、忘れてしまうことこそが最も残酷であり、過去を直視し、語り継ぐことが私たちの使命であると強く心に刻むことができました。

一方で、心を温めてくれたのは現地の学生との交流でした。私は大学で少しだけ中国語を学んでいましたが、緊張しながら「你好」と声をかけたときに返ってきた笑顔で一気に緊張がほぐれたように感じます。片言の日本語や英語を交えながら会話を重ねるうちに、言葉が完璧でなくても心は伝わることを実感することができました。私はこれまで将来を自分自身のために考えることが多かったですが、彼らの言葉を聞いて、家族や社会を思い描きながら勉強し続け生きる姿勢を学ばせていただきました。最後には連絡先を交換し、「また会おうね」と別れることができました。国境を越えた友達ができたという実感は、この研修に参加したからこそ得られた宝物です。

また、観光地やお店、ホテル、飛行機の中でも、多くの人々が私たちに温かく接してくれました。言葉が通じなくても笑顔で助けてくれた現地の方々からニュースではなかなか伝わらない現地の人々の親切さや人柄の良さを知ることができ、中国という国を身近に感じることができました。

三都市それぞれ魅せられる表情が違ったのも実際に行ってみて初めて気づけたことでした。北京は首都らしいスケールと悠久の歴史が調和する街であり、長春は産業と文化が息づく都市で、人々の暮らしの力強さを感じました。そして瀋陽は歴史の記憶を抱えながらも、出会った人々の笑顔や明るさが印象的で、今を生きる力を最も強く実感した街でした。

今回の訪中で学んだことは、過去の歴史を忘れず次の世代に語り継いでいくことの大切さと、人と人との出会いが国と国を結びつける力になるということを実感しました。政治や経済の面ばかりが取り上げられていますが、実際に現地に足を運び、人と人とが触れ合うことで初めて、中国の良さも、課題や難しさも見えてきます。今回の研修で得られた実

感は、机上の知識では決して得られないものであったと思います。

訪中を終えて考えたのは、私たちの世代が果たすべき役割についてです。歴史を学び、過去から目を背けない姿勢を持つとともに、人と人とのつながりを大切にして未来を築いていくことこそが今回の経験を通じて得た答えであり、私自身がこれから生きる上での指針になっていくと思いました。今まで私が他の人からもらった優しさや学びを社会に還元したいと考えている私にとって、この学びは必ず糧になると信じています。今回の訪中で感じた歴史の重み、中国の学生と結んだ友情、そして街で出会った人々の優しさ。これら三つの経験は、私にとってかけがえのない宝物です。今回の訪中を経て私は、過去を忘れずに未来を考える姿勢を持ち続け、国境を越えて人々と理解し合える社会をつくる一員でありたいと強く思います。

「学びの一週間」

3号車—A班 静岡文化芸術大学 橋場若菜

今回の訪中国を通じて、中国の歴史や文化、そして現地の人々の姿に直接触れることができ、非常に貴重な経験となった。まず共産党資料館では、日本と中国の戦争の歴史をファシズムの視点から学び、中国国家の建設の歩みを知ることができた。特に新しい経済の考え方を取り入れ、科学技術の発展を通して中国が大きな成長を遂げてきたという点は印象深く、展示を通じて、現在の中国がどのように国を形づくり、発展を続けているのかを理解することができ、習近平についての記述からも中国の国家運営に対する考え方を垣間見ることができた。

また、9.18 資料館の訪問も強く印象に残った。満州国の誕生から第二次世界大戦の終戦による崩壊までの歴史を詳しく学ぶ機会はこれまで少なかったため、新鮮で興味深い内容であった。特に「偽満州国」という表現や、日本に対する「敗北」といった強い言葉が使われていた点は印象的で、中国における歴史の捉え方や表現の違いを実感する場面でもあった。訪問の時期が記念日に近かったため、記念講演が行われており、その場の緊張感や雰囲気から中国人の愛国心の深さを強く感じることができた。この経験は、単なる歴史の学習にとどまらず、中国の思想や国民意識に直接触れる大きな機会となり強く印象に残っている。

生活面では、食事を通じて文化の違いを体感することができた。事前研修では中国の食事が胃もたれしやすいと聞いていたため不安があったが、実際には問題なく美味しくいただくことができた。しかし、一品ごとの量が多く、品数も豊富であるため、一口ずつでもすぐに満腹になるという点が日本の食事スタイルとの大きな違いであると感じた。また、中国では食べ物を残すことが良しとされる文化があると聞き、食事が贅沢であると同時に文化の違いを改めて意識するきっかけとなった。

さらに、団員との交流も大きな学びとなった。事前研修で「訪中国では仲良くなる」と聞いていたが、当初は半信半疑であった。しかし、実際に一週間で共に過ごす中で、グループ発表の練習や門限までの自由時間を通して徐々に打ち解け、最終日には別れが名残惜しくなるほどの関係を築くことができた。この経験から、共同生活の中で自然と仲が深まっていくことを実感し、人との絆の大切さを改めて考えさせられた。

訪中前と後で、中国人に対するイメージにも変化があった。もともと交換留学生として中国人の友人がいたため強い偏見はなかったが、現地の人々については「気が強そう」という印象を持っていた。しかし、実際にお店でのやり取りやガイドとの交流を通じて、多少気の強さは感じられるものの、攻撃的ではなくむしろ親切に接してくれる人が多いことに気づいた。また、戦争記念日に近い時期であったため愛国心の強さも感じられたが、それは敵意ではなく自国を大切に思う気持ちの表れであると理解することができた。

総じて、今回の訪中国は中国という国を歴史・文化・人々の両面から深く理解するきっ

かけとなった。国同士の関係は必ずしも良好ではないが、人と人との関わりにおいては偏見を取り払い、互いを理解し合うことが大切であると強く感じた。言語や文化の違いから意見の相違が生じることもあるが、それを受け入れる姿勢を持つことで、より良い友好関係を築くことができるのではないかと思う。今回の体験を通じて、隣国である中国との関係をこれからも大切にし、積極的に交流を続けていきたいと考えている。

「直接感じて得たかけがえのない経験」

3-A 創価大学 羽尻菜々美

今回、日中友好協会主催の訪中団として中国を訪れ、現地の人々と交流する中で、私が抱いていた中国人のイメージが実際とは大きく異なっていたことに気づき、驚きとともに多くの学びを得る貴重な経験をすることができました。参加前、私は「九・一八事変」

（盧溝橋事件）やその後の歴史的経緯から、現在でも多くの中国人が日本人に対して否定的な感情を抱いているのではないかという先入観を抱いていました。しかし、実際に中国の地を訪れ、現地の人々と直接交流する中で、私の抱いていた考えは的外れであったことを実感しました。私たち訪中団に対して、中国の方々は温かく友好的に接してくれました。

また、訪中の中で特に印象深かったのは、「九・一八」歴史博物館や東北陥落史陳列館の見学です。これまで学校教育の中では深く学ぶ機会がなかった九・一八事変を発端とする日中戦争の詳細について、初めて具体的に学びました。館内には、一般市民が無差別に被害を受けた事実や細菌戦部隊の存在など、非人道的な行為の数々が、生々しく悲惨な記録として展示されていたことに強い衝撃を受けました。日本の侵略によって命を落とした中国人の数は、なんと 64 万 7900 人にものぼり、これは日本が第二次世界大戦で原爆により失った命の約 3 倍に相当します。このような悲劇があったことを、私は恥ずかしながら今回の訪中まで知りませんでした。自国がかつて引き起こした過ちについて、きちんと学ぶ機会がこれまでなかったこと、また、教育やメディアで十分に提起されてこなかったことに対して、強いショックと疑問を感じました。

一方で、万里の長城や故宮などの世界遺産を実際に訪れたことで、その壮大なスケールに圧倒され、日本との歴史的背景や建築の規模の違いに驚嘆しました。これまで学校の世界史や古典の授業で中国の歴史に触れる機会はありませんでしたが、その学びはどこか受け身で、自分の関心として深く掘り下げることは多くありませんでした。しかし、今回の訪中を通じて歴史的建造物を間近に見たことで、自分の中に「もっと中国の歴史を知りたい」という思いが自然と湧き上がってきました。教科書の中でしか存在していなかった歴史が、現地に立った瞬間に生きたものとして実感できたことは、私にとって大きな心情の変化であると感じています。この気持ちを今後も大切に、さらに学びを深めていきたいです。

また、吉林大学での交流では、現地の学生の方々が日本語で話しかけてくださり、その温かい心遣いに感動しました。そして、他国の方が自分の母語でコミュニケーションを取ってくださることが、これほどまでに嬉しいことなのだと初めて実感し、私自身も今後、他国の方々と交流する際には、その国の言葉で話せるよう努力したいと強く感じました。私はこれまで中国語を専攻した経験がなく、簡単な挨拶程度しか話すことができませんでしたが、今回の交流を通じて、中国語を学び、話せるようになりたいという気持ちが芽生

えました。このような気づきも、現地の学生の方々と直接交流する機会があったからこそ得ることができたと感じています。

このように、訪中団への参加を通して、単なる観光では決して得られない、非常に多くの貴重な経験を積むことができました。さらに、共に学び、互いの思いを分かち合える素晴らしい仲間との出会いもあり、私にとってかけがえのない存在となりました。できることなら、日本中の多くの若者にも、この訪中団で得られるような経験をしてほしいと心から思います。しかし、今回このような限られた機会の中で、メンバーの一員として参加させていただけたことに、改めて深い感謝の気持ちでいっぱいです。今後は、私が中国で学び、感じたことを家族や友人に伝えていくとともに、自身の中でも中国への理解をより一層深めていきたいと考えています。

最後になりますが、私たち学生にこのような貴重な経験の場をご提供いただきましたことに日中友好協会の皆様へ心より感謝申し上げます。

「初めての中国と異文化理解の重要性」

3号車 A 班 静岡文化芸術大学 福井久也

今回私は、2025 日中友好大学生訪中団第 3 陣の一員として、9 月 8 日から 14 日までの七日間で北京市、瀋陽市、長春市を訪問する機会をいただいた。100 名を超える人達との団体行動、そして私自身初めての中国ということで責任感や緊張感を抱きながらも非常に意義深い経験を積むことができたと感じている。

はじめに中国と日本の違いを認識したのは、北京首都国際空港に到着して次の目的地に向かう時の交通手段である。エアポートエクスプレスと呼ばれるその乗り物は、電車と新幹線が混合したような見た目で、地下鉄ではあるが上のフロアから見えるぐらい近い場所を通っていた。他にもキャッシュレス決済システムが隅々まで普及していること、買い物の間は大体店員がおすすめしてくること、料理の品数と量が多いことなど、隣国でありながら文化の相違が著しいことを感じた。

二つ目に、都市のスケール感や歴史の厚み、そして文化を伝えるための展示やその工夫に驚かされた。今回は博物館に訪れることが頻繁にあり、中国共産党歴史展覧館では習近平国家主席をはじめとした各年代の功労者を尊敬と敬愛を以って、過去と現在をつなぐ架け橋としての展示に深い感動を覚え、長春都市企画館の近い将来確実に完成するだろう都市の未来図には、人々が快適に暮らせるような気遣いが感じられた。すべての建物のスケールがとにかく大きく、映像越しで見る風景と実際に自分の目で見て全身で感じるものとは大きな隔たりがあり、自分自身がいかに小さな存在であることがよく分かった。

三つ目に、スケジュールの都合上、私達は街の人と触れ合う機会は少なかったが、バスの窓から外を覗いたり、少ない自由時間で街を見渡したりすると、一部ではあるが中国人の日常生活や習慣を垣間見ることができた。道路には明るい色のレンタル自転車を漕ぐ人や、ヘルメットを被らずに電動バイクで走る人の方が多かったり、仕事中にスマホを使っていたりもしていた。お土産を探していたら、店員がすぐさま商品を持ってきて説明してくれた。特に印象に残っていることは、遼寧大学を訪問中、友達と散策していた時にカップルが楽しそうに話していたのを見たのだが、次の瞬間、男性が道端に唾を吐き捨てたのである。女性が何も気にしていないことも相まって、私たちはこの行為に驚き思わず笑い合ったのだが、今回の訪中を振り返るとそのような行為を何度も見てきたのだ。

中国は日本と似ているようで、経済・文化の根底には異なる価値観や歴史的背景が息づいている。自国ではマナー違反だとされる行動も、他国では普通であり逆にこちらを不思議な目で見ていることも十分に考えられる。一週間という短くも長い期間を自国の文化が通用しない場所で過ごした経験は、価値観の転換を促す契機となり柔軟な思考と多様性への理解をより一層深め、これからの人生において大いに役立つものになると思う。

最後に、今回の訪問で出会った現地の皆さまをはじめ、随行いただいた先生方やスタッフの皆さまからの温かいご支援に、心より感謝申し上げます。この貴重な経験を、今後の学びや行動へと確実に活かしてまいりたいと考えております。

「真の「日中友好」のために」

3-A 東北大学 藤井宏夢

「日中友好」とはなんだろうか？

今の日本と中国の現状は日中友好とはいえないのか？

国交正常化とは違うのか？

そもそも、どの段階が「日中友好」の達成といえるのか？

上記の問いは、私が訪中するにあたって持っていた問いである。そして、これらの問いは訪中後も解決しなかった。日本と中国の関係は、私達個人がそれぞれに持っている「友達」との関係よりもさらに繊細な、様々な人々を包含した国家間という複雑な関係だからである。また、日本と中国が歩んできた歴史もその複雑さを増す要因となっているように思う。その歴史の複雑さ、両国間の緊張は特に東北陥落史陳列館や九・一八歴史博物館で感じることができた。日本の教科書では学ぶことができなかった新たな視点を習得し、より深く、より真剣に歴史を学ぶ契機となり、過去の歴史は変えられないにせよ今後の変化しうる未来に向かって自分の中で歩みを進めるための第一歩を踏み出すことができたように思う。

あるドラマの中の私の好きな言葉に、「真実は人の数だけあるんですよ、でも事実の一つです」というものがある。両国の戦争時代を生きた人々、戦後に生まれた人々、残留孤児として生きた人々、戦争によって親しい人を亡くした人々、戦争を主導したといわれる人々、戦後復興に携わった人々、それぞれにそれぞれの選択があり、それぞれに事実としての生活がある。事実としての戦争を経験した両国が、事実としての友好を結ぶことは難しいかもしれない。しかし、真実としての友好を結ぶことは可能であるだろうし、実際に今回の大学訪問や中国の方との交流でできたように思う。その意味での「日中友好」ならば目指すべき段階を定義することは難しいといえども目指しやすいように思っている。現状、日本国内でも中国国内でも同様のことであるが、友好を進めることに賛同する人の数があまり多くないように思う。それは、SNS やメディアでの報道で特に顕著に感じる。

今回の訪問で私が考え、感じた一つの結論は、「日本の多くの人が『中国』という漠然とした形を持たない概念に対して抱いている感情は、中国の多くの人が『日本』という同じく漠然とした形を持たないものに持っている感情と同じようなものである」ということである。今回の訪中を見て、中国現地の方々がどう思われたかは分からない。抗日 80 年という重要な年に中国に訪問できたことはとても貴重な経験であったと同時に、我々の行動が日中間の友好に及ぼす影響の大きさをひしひしと感じた。

ごく一部の人の姿を見て、国家全体を判断することは根拠として非常に薄く、危険な行為であると思っている。しかしながら、私達人間は社会性を持った人間として、時に主観的な判断をとってしまうことも往々にしてある。常に自分が客観的な視点を持てているかどうか、主観と客観の使い分けを上手くしていくことが必要であると思っている。

SNS の発達が進み、インターネット上でのグローバル化が進んだ現代の社会は、

「『それっぽい』ことを『それっぽく』伝えれば、『それっぽく』伝わる」

社会であると思っている。一番初めに記した問いも、『それっぽい』人が『それっぽく』伝えれば、多くの人がこれが正解だと認識して、インターネットの拡散能力によってあっという間にその意見が広がってしまうのだと思う。しかしながら、私は初めに挙げた問いは、いずれも答えのないことが正解な問いであると思っている。人々が、真の友好とは何か、悩み、苦しき、時に批判し、時に手を取りながら、やすらぎと幸福の未来に向かって歩を進めていくことが本質なのではないかと思っている。

最後に、それでも今なお、かつての歴史の繋がりの中で、苦しみと怒りを感じている人々が世界中にいることを肝に銘じた上で、宇宙船地球号に乗車する全ての生物の「真実」かつ「事実」としての幸福を願っている。

「訪中を通じて学んだこと」

3-A 安田女子大学大学院 増岡由真

私はこのたび、日中友好大学生訪中団の一員として一週間にわたり北京・長春・瀋陽を訪れる機会を得た。これまで中国と直接関わることはほとんどなかったが、この七日間の学びと交流を通して、自分の中にあった中国へのイメージが大きく変化しただけでなく、将来教員を目指す者として平和や国際理解の大切さを深く考えるきっかけとなった。

まず心に強く残ったのは、東北陥落史陳列館や「九・一八」歴史博物館を訪れたことである。そこでは、日本がかつて中国東北部に進出し、多くの人々に痛みを与えた歴史が詳細に展示されていた。日本人である自分にとって、直視することが苦しくもあったが、同時に「二度と戦争を起こしてはならない」という強い思いを新たにした。平和は当たり前ではなく、日々の努力によって守られるものだとして改めて実感した。現在の日中関係には複雑な側面もあるが、だからこそ、こうした歴史の記憶を踏まえながら、未来志向の友好を築いていかなければならないと強く感じた。

また、吉林大学や遼寧大学を訪問し、現地の学生と交流できたことも大きな財産となった。私は中国語を全く話すことができないが、それでも相手の学生は笑顔で接してくれ、身振りや簡単な英語を交えながら親切に交流してくれた。言葉が通じなくても、人と人との心はつながることを身をもって体験した瞬間である。ニュースやメディアを通して抱いていた中国への堅いイメージは、この交流によって大きく和らぎ、「もっと関わってみたい」という前向きな気持ちに変わった。人の優しさや温かさは、国境を越えて伝わるものだとして実感した。

観光面でも、多くの貴重な体験をさせてもらった。世界遺産である万里の長城や紫禁城を訪れ、中国の歴史と文化の壮大さに圧倒された。書物や映像で見ると実際に自分の足で立つのとでは、受ける印象が全く違う。万里の長城の果てしない続き方や、紫禁城の華麗な建築は、中国という国が歩んできた長い歴史の重みを感じさせた。日本にはないスケールの大きさを目の前にして、「隣国でありながら、こんなにも豊かな文化があるのだ」と新鮮な驚きを覚えた。

さらに、中国という国の「大きさ」を強く意識させられた出来事もあった。例えば、一つの大学の敷地が日本の徳島市よりも広いと知ったとき、そのスケールの大きさに思わず驚嘆した。どこへ行っても建物や道路が広々としており、中国全体のダイナミックさを実感した。

この訪中を通して感じたのは、中国が「大きい・広い」という物理的な特徴だけでなく、人々の考え方や文化の深さもまた「大きい」ということである。その一方で、そこに暮らす人々は私たちと同じように日々の生活を送り、学生は将来に向かって努力をしている。当たり前のことではあるが、実際に現地に足を運んで交流することで、国の違いを超えた共通点や親しみを実感できたことは大きな学びとなった。

私は将来、小学校の教員として子どもたちに学びを伝える立場になる。今回の経験は、必ずその教育実践に活かしていきたいと考えている。例えば、歴史を学ぶときには「戦争は過去の出来事」ではなく、「二度と繰り返してはいけない出来事」として伝えることが大切である。また、国際理解教育においても、自分が中国で感じた「言葉が通じなくても心は通じ合える」という実体験を、子どもたちに具体的に伝えたい。ニュースや偏った情報だけで他国を判断するのではなく、実際に人と関わることで得られる理解の大切さを伝えることは、これからの時代に必要な教育であると感じている。

今回の一週間は、私にとってかけがえのない経験となった。戦争の歴史を学び、平和の尊さを改めて認識するとともに、中国の文化や人々の温かさに触れ、これからの日中友好の担い手の一人としての自覚を持つことができた。今後は、日常の中でも中国や他国に関心を持ち、互いを理解し尊重する姿勢を大切にしたい。そして、未来を担う子どもたちにその大切さを伝えていくことで、少しでも国際社会に貢献できる人間になりたいと考えている。

「中国を訪れて」

3-A 桜美林大学 米倉光紀

今回の訪中国に参加し、中国を実際に訪れることで多くの学びと気づきを得ることができました。日程は非常に密度が高く、北京・長春・瀋陽と複数の都市をめぐる中で、中国の歴史や文化、そして現代社会の姿を多角的に理解する機会となりました。事前に資料を読んだり授業で学んだりしていた知識もありましたが、やはり現地を自分の目で見て、現地の人々と交流することで得られる実感はまったく異なるものでした。

最初に訪れた北京では、空港到着後にすぐ行動が始まり、首都ならではの規模感や活気を感じました。特に市内観光では、中国の歴史の重みと現代的な発展が隣り合っていることに驚かされました。歴史的建造物が街中に点在しつつも、その背景には高層ビルが立ち並び、伝統と近代化が同居している光景は、日本ではなかなか見ることができないものです。夕食の場では中国独特の料理や食文化に触れ、味だけでなく食事の進め方や雰囲気の違いを実感することができました。

長春では、現地大学を訪問して学生との交流を行いました。ここでは、言葉や文化の違いを越えて学生同士が積極的に交流する姿が印象的でした。中国の学生たちは非常に勉強熱心で、日本への関心も高く、互いの国について質問し合うことで多くの共通点と相違点を発見できました。また、博物館や歴史的建築物の見学を通して、長春が旧満州国の首都としての歴史を持つ都市であることを深く学びました。かつて日本と深い関わりを持った地域を訪れることで、自分が歴史を学ぶ意義を改めて考えさせられました。

瀋陽ではさらに歴史的な背景に触れることができました。瀋陽故宮や博物館を訪れる中で、清朝の歴史や文化、そしてその中に日本との関わりが刻まれていることを知りました。特に、満州事変やその後の日中戦争の舞台となった地域であることを実際に歩くことで、歴史が単なる教科書の中の出来事ではなく、現実に関わりの生活に影響を与えた出来事であることを強く実感しました。自分が日本人としてここを訪れる意味についても考えるきっかけとなり、歴史認識を深める大切さを痛感しました。

全体を通して印象的だったのは、中国の人々の温かさと、日中関係に対する前向きな姿勢です。交流の場では歓迎の気持ちを強く感じ、互いの文化を尊重し合う雰囲気がありました。同時に、中国社会の急速な発展や都市の変化のスピードには圧倒されました。街を歩けば多くの人々がスマートフォンを使いこなし、キャッシュレス決済が浸透しているなど、日本以上にデジタル化が進んでいると感じました。こうした現状を肌で知ることによって、日本と中国の違いをより鮮明に理解することができました。

今回の訪中国での経験は、単なる旅行体験にとどまらず、将来を考える上でも大きな財産になったと感じています。異文化交流を通じて視野が広がり、歴史を学ぶことの重要性や、相互理解の大切さを実感しました。今後は、この経験を活かして日中の架け橋となれるような存在を目指したいと考えています。日本に帰国した今も、現地での出会いや学び

を思い返しながら、自分にできることを模索していきたいです。

このように、7日間という短い期間ながらも非常に濃密な時間を過ごすことができました。訪中国に参加できたことに心から感謝するとともに、この経験を自分の成長につなげていきたいと思います。